

ぼうや

旭川市立緑が丘中学校 二年 宮腰 七海

ガラスの中の水に向かって声を出すと、水が『震動』する。その原理と同じように、人が発する声は自他ともに心を動かすときがある。つまり『心動』させることができるのだ。

それはヒトが生まれながらに持っている能力であろう。お年寄りでも、成人したばかりでも、学生でも、生まれたての赤ちゃんでも、誰でも心を動かすことができる。今から十一年前、私が三歳のときに、初めての弟が産まれた。そんな時に起こった出来事を書いていきたい。

真夜中の助産院。眠っていたのに父に起こされた。弟がもうすぐ産まれると言うのだ。普段は眠いと不機嫌な私も、このときはばかりは走って寝室を出ていった。なぜなら今から自分のひとりっ子卒業式が始まるからだ。

薄暗い廊下を風になったような気分で走り抜け、かんきつ類の甘いにおいがする階段を転がるようにかけ下りて……。

「ぼおやー！」

重いドアを開けたら、そこにはまだ名前もない弟がいた。私は、仮に決めた名前『坊や』を連呼する。産声を、悲しくて泣いていると勘違いしたのだ。

壁が産声を反響し合って、部屋の中の空気を全て震わせていた。

一方、私の心も震えていた。今日からお姉さんだ！という緊張もあるし、三歳なりに感動した。だから、跳びはねながらひたすら「坊や」を繰り返す。それを、産声が止むまで、ずっと続けた。

しかし、坊やに本当の名前がついた頃、私は今までにない複雑な気持ちを持っていた。お母さんが、自分から離れていってしまう……。お父さんもどうしてだろう……。世間で言う赤ちゃん返りの時期だった。それまで父と母を独り占めしていた私には、不思議で仕方がなく「足が痛くて立てない。」と言ってみたり、自分でぶつけたけがを弟のせいにしてみたりした。三歳も年の離れた弟なのに、ライバル意識をすることしか両親を振り向かせられない。そんな自分にも腹が立っていた。

それから月日が経っても、赤ちゃん返りの勢いは増していく。親のちよっとした

行動にも反応するようになった。寝る時に、背中を向けられると悲しくなるし、押しとしては駄目な非常用ボタンを押ししたい。痛くもないのに「お腹が痛いよう。」と泣く。私に悪いことをしているつもりは無かった。ただただ、こっちを見て欲しかった。

こんな毎日が続いていたある日、私は、いつもと違う手段を見つけた。弟に直接怒ればいいのだ。八つ当たりの感覚は捨ててしまい、『怒り』という一つの感情を全部声にして、言い返すことのできない弟にぶつけた。

すると、予想通り弟が泣いて、片仮名のハの字のようなまゆ毛をした母が走ってきた。母はやはり弟をあやし始め……。

その瞬間。

『坊や』の産声が再び聞こえた気がした。

姉になった日の記憶が、耳から全身へと広がっていく。目を閉じていると、弟が産まれたとき自分はどんな気持ちだったか、鮮やかに思い出される。嬉しかった？ 悲しかった？ ……嬉しかった。どんな風に喜んだの？ ……跳びはねて喜んだよ。なんて自問自答をしていたら急に心が温かくなった。そして弟の泣き声が聞こえなくなる頃には「坊や、思い出したよ。」と言って母と二人で笑った。だから、その夜はかんきつ類の甘いにおいのお風呂で、助産院も思い出した。もう、私に赤ちゃん返りなんて言葉は無かった。

産まれたての坊やの声は、ときを越えて私の心を動かしてくれた。声で『心動』させることは、誰でもできる。文字を通して感情や情報を出したり読みとったりすることの多い世の中でも、たまには声で伝えてみよう。そうしたとき、きっと、心の中に新しい道『新道』がつくられていくだろう。